

人に優しい、まちの交通を考える 一都市の交通手段としての自転車をみなおす一

建設工学科教授 山中英生

昭和32年7月8日生 京都市生まれ

■ 交通の研究に入ったきっかけは大阪万博

1970年、中学1年の時、大阪万博で自動運転の自動車に乗った思い出がなぜか残っていて、大学を決めるとき、京都大に交通土木工学科があるのを見つけて、入ったのが、いまの仕事につながっています。

■ 交通を飼い慣らす

卒業研究は車道をジグザグにして、クルマがゆっくり走るようにしたコミュニティ道路の設計でした。速度を落とすシケインの度合いを調べるのがテーマでした。クルマが遠慮する道をデザインするのが英語では Traffic calming(「クルマ飼い慣らす方法」として世界中に広まっています。

■ 自転車研究のはじまり

日本の自転車の交通通事故率は高く、しかも、世界に例のない自転車が歩道を走る国です。10年ほど前から交通量や歩道幅から歩道で混在をやめる判断基準を作っています。最近では、全国の研究者があつまる研究会を始めて、研究会やフォーラムを開催して、自転車まちづくりを広めたり、最新情報を共有する活動をしています。最近は、福山市、奈良県、兵庫県などの計画づくりに参画しています。

■ 自転車の問題

いつも問題になるのが自転車のルールとマナー違反です。デンマークでは、小学校1年生から高校生まで毎年、交通安全に関する教育プログラムが開発されていて、学校での体系的な教育ができていました。高校生にはルールを守らないとけがをするぞ、おどろおどろしい教材を配ってたりしてます。日本でも高校生への安全教育が始まっていますが、これからです。

■ 最新の研究 情報提示技術の開発

道路デザインが専門なので、道路の自転車に対する情報提示性(インフォマティビティ)を高めるという研究を始めています。道を自転車で走ると、どこを走ればいいのか分からない場所があります。歩道では歩行者が優先案ですが、そのことは伝わっていません。交差点で待つ場所もわからない。日本の道は自転車にとってインフォマティビティが低いのです。一方、フランスでは、自転車の走るところには必ずブルーグリーンのサインがはいつていて、自転車の走るところが分かるようになっています。それで、自転車の走行方向を示す矢羽根型マークをデザインする研究を始めています。自転車ユーザーの視点の特性をみて、サインの大きさや色とか間隔を決めようと実験をしています。また、歩行者と自転車を柵で分離した192号のところで、自転車を誘導する実験をしています。

■ 研究の未来

道に自転車が走る場所が見えるだけで、自転車を大切にしている街だという雰囲気生まれます。自転車がリスペクト(尊敬)される街、自転車が走る風景が誇れる街を造りたいと考えています。



▲日本最初のコミュニティ道路



▲シケイン実験



▲デンマークの交通安全教材



▲パリの自転車道と自転車マーク



▲192号で実験中の自転車マーク